

<b>発表タイトル</b>	誘導技術としての鹿寄せ —奈良公園におけるシカの集合と移動をめぐって—
<b>発表者所属名</b>	地域文化学 専攻
<b>発表者氏名</b>	東城義則
<p>本発表では、奈良公園内において行われる鹿寄せを事例に、職能集団による動物を誘導する技術について考察する。そして、人と野生動物との接触の脈絡から、誘導技術の位置づけについて検討する。</p> <p>従来まで、動物の行動管理をめぐっては、狩猟採集民や牧畜民による生業活動の脈絡において分析されてきた。特にヒツジ、ヤギの家畜群の行動管理に関する技法研究において、家畜と相互行為を行う牧夫、牧童の重要性が指摘されてきた。</p> <p>そこで本発表では、野生動物の家畜化や、牧畜業の成立を主題とした生業技術の研究を念頭に、鹿寄せを誘導技術と捉えることで、鹿寄せを行う職能集団の技能と、シカを誘導する技法について考察する。分析は、鹿寄せの参与観察、関係者への聞き取り、ならびに歴史資料や古写真、絵はがきの検討に基づいている。</p> <p>現在の鹿寄せは、奈良公園の一角に位置する飛火野において行われるイベントである。(財)奈良の鹿愛護会のスタッフが、ナチュラルホルンを吹奏することで、生息する野生のニホンジカ (<i>Cervus nippon</i>) が四方より飛火野に集まる。集まった鹿に対して、ホルン吹奏者がドングリを与えて、イベントは終了する。鹿寄せは愛護会のスタッフによって行われ、スタッフ内でホルン吹奏、交通整理、募金活動など、役割分担を決めて行われる。</p> <p>鹿寄せは、1892年(明治25)より行われ、昭和戦時期の中断を挟みながら、現在まで継続されてきた。もともとは、楽器によってシカを効率よく集めて、保護収容施設である鹿苑へとシカを誘導する技法である。この技法を応用することで、観光イベントとしての鹿寄せが成立した。また鹿寄せは、100年近く長期的に実施されるなかで、技法の変容を遂げてきた。代表的なものとして吹奏に用いる楽器、実施回数、実施場所の変化などである。また、楽器吹奏に反応するために、シカを特別に訓練していた時期や、シェパードを用いて行われていた時期もある。</p> <p>鹿寄せの技法が変容する背景は、次の2点に集約される。(1)鹿の生態に対するスタッフ(鹿守)の適応、(2)財団法人の運営方針による技法の更新、である。(1)は鹿の個体数増減と、これに伴う行動範囲の変化により、鹿寄せを実施する場所が変更され、楽器を用いた鹿の馴致が行われる。(2)は、保護団体の運営方針、事業内容の見直しにより、実施する頻度の検討と、技法の更新が行われる。</p> <p>誘導技術としての鹿寄せは、職能集団の技能に基づく、楽器を介した集合を促す作用と、適切なルートに鹿を移動させる作用から成立している。誘導技術の成立背景には、音の学習による一時的な行動管理と、日々の保護活動を前提とする職能集団とシカとの相互作用が認められる。</p>	